

3 . 都市史とスポーツ史の交差

- ドイツ語圏都市史論集 (2008 年刊) から -

上野 卓郎

『都市的事象としてのスポーツ』(Sport als städtisches Ereignis. Hrsg. von Christian Koller. 2008. Thorbecke Verlag, Ostfildern) というドイツ語圏都市史論集から、「序説：都市とスポーツ」を取り上げる。その概要を要約すれば、1 . 近代スポーツは本質的に都市的現象であり、その成立は都市化と不可分に結合していること、2 . ブリテン外の空間での近代スポーツの分析はひとまず異質な文化財の取得と対決しなげなければならないこと、3 . 余暇研究の領域が都市史的スポーツ研究の第二の領域としてあり、そのさいドイツ語圏ではスポーツの社会的場 (ゾチアールオルト) の規定に重点が置かれたこと、4 . 第一次大戦と文化的「アメリカ化」が社会的ミリューでの社会的分節化 (セグメンティールンク) をほぐすのに寄与したこと (階層を越えた文化財としての観客スポーツの出現を助けたこと、伝統的性秩序に影響を及ぼした 20 年代の前衛的都市性による「新しい女」像とその変種としての「スポーツガール」の出現)、5 . スポーツの都市建築的アスペクトが更なる研究分野としてあり、そのさい「スタジアム建造の人類学」への原理的問いが設定されるべきであり、また、スポーツ・インフラストラクチュア建設と都市発展の間の連関のより厳密な調査が肝心であること、6 「パフォーマンス」(言語運用) 概念を中心に集まる都市史とスポーツ史の交点での研究パースペクティヴ、その下での分析課題として、スポーツ大行事での都市そのものの演出、そうした行事内部のパフォーマンス、都市的空間、スタジアム、ストリートでの編成された身体の演出の分析、リレー (シュタフェット) の重要な役割があること、というものである。以下、詳しく見ていこう。79 に及ぶ文献注は省略する。

1 . 近代スポーツは本質的に都市的現象であり、その成立は都市化と不可分に結合したことは、次のように説明される。

エリートのゲームと競争が広範な都市住民層の娯楽に転化し、スポーツ的活動、あるいはスポーツ的行事の観客として余暇を使用する。その豊かで多面的な帰結として、スポーツフェラインが重要なアイデンティティ対象になり、都市、都市部、都市住民グループの間の張り合い (ライバル性) によって決着するようになる。加えてスポーツは一つの経済的ファクターに昇進する。すでに早く都市的ホテル・レストラン経営との密接な共生を始める。ついにはスポーツの大衆化による都市建築的帰結も示される。スポーツ的インフラストラクチュアが都市像の放棄できない構成部分になる。スタジアムは都市の自己表現の威信建造物に昇進する。20 世紀中葉以来、投光照明ポールは近代都市社会におけるスポーツの重要な役割を知らせるものとなった。スポーツと都会性 (アーバニテート) のこの密接な結合に基づけば、オリンピックがその巨大な成長にもかかわらず更に引き続き都市に (国家にではなく) 委託というのも不思議ではない。遅くとも両大戦間期以来オリンピックの開催は、今日立地マーケティングと表されるものの一つの本質的エレメントに発展、より大きな経済的・政治的重要性を持つものになる。

スポーツが 19 世紀後期と 20 世紀初期の文化的グローバル化現象として一般に「Europäistik」として、あるいは「ワールドヒストリー」として営まれるヒストリオグラフィの不可欠な研究対象であるとするれば、これはその都市的性格に基づいて全く特に近代都市史に当てはまるというのである。

2 . ブリテン外の空間での近代スポーツの分析は、

まず一度、異質な文化財の取得(アイクヌク)と対決しなければならなかったことについて。

スポーツはそのユニバーサルな規則とオープンな競争で、19世紀の最後の3分の1に技術的、商業的な青年にとって大陸でもかなりモダニテートを具現した。モダニテートは、自由貿易、コスモポリティズム、競争の原理に導かれる。故にフットボールがまずもって産業的に最も進んだ国々に足掛りを得ることができたのは驚くことではない。それが最も急速に普及したのは、一人当たり最高の国民総生産の3つの国家、スイス、デンマーク、ベルギーである。「ブリティッシュ・スポーツ」の取得は、19世紀の英独文化移転の分析のための関連研究によって発展させられた進行図式(アブラウフシェーマ)に従う。(1)2つの行為の統一の間の定義、すなわち、自分のもの(アイゲネン)と自分のものでない(ニヒトアイゲネン)の間の識別、(2)取得願望の成立、(3)知るに値するものの選抜、(4)第一次取得、(5)第二次取得、すなわち、自国の構造と行為連関への取得されたものの適応、(6)他国の固有の像に関する追思性。

ドイツ語圏での近代スポーツの始まりの研究は、それがアクチュアルに「文化移転」、「トランスナショナルリテート」あるいは「イストワール・クルワゼー(交差する歴史)」の下でどのように議論されるかという問題設定にとって理想的な研究分野である。

ドイツ語圏でのブリティッシュ・スポーツはトゥルネン運動と強く固定された競争に出くわした。トゥルネン運動は、広く分岐したフェライン体を意のままにし、政治的エリートの奨励も享受した。ドイツ・トゥルナーシャフトは1913年11.100フェライン、9.200集落に110万人以上のメンバーを有した。対決を「システム闘争」として把握したトゥルナーは、スポーツを外国のものとして烙印を押し、それを馬鹿にしようとした。

3. 都市史的スポーツ研究の第二の領域は余暇研究の領域に導くことについて。

1) 都市化、余暇、スポーツの連関への体系的

研究はUSAに関してすでに長い間存在する。ドイツ語圏ではとりわけ北西ドイツ地域とウィーンに関して研究された。そのさい特別な重心はスポーツとその個々の種目の社会的場の規定に置かれた。ドイツ語圏ではフットボールは両大戦間期に下層の、特に労働者のスポーツに変化する。ドイツ語圏での初期フットボールの普及とかなり正確にブルデューのディスタクシオン・テーゼのモデルと一致するがその社会的場の変化は、傾向的に30-40年の遅れでグレートブリテンでの発展の跡を追った。そのさいグレートブリテンと同様、増大する都市化がフットボールの流行にとっての本質的な推進契機である。

19世紀の最後の3分の1に作り上げられ、宗教や世界観、政治的所属、経済的状态、文化的志向のような共通のメルクマールによって特徴づけられる「社会モラル的ミリュー(環境)」へのドイツ語圏の社会の分節化(セグメンティールンク)はスポーツの世界においても連盟構造において反映された。そのさいとりわけ比較的大きな都市で両大戦間期に様々な世界観の方向を持つスポーツフェラインが並んで存在。これまでの研究はその焦点をフットボールに、そしてこのスポーツ種目の社会的場をとりわけ労働者ミリューに当てた。すなわち、空間的重点は様々なサイズの都市での労働者スポーツ運動[原文では労働運動スポーツ]への研究と並んでルール地方とウィーンにあった。

2) ルール地方 ジークフリート・ゲールマンが1970年代後期以来多数の公刊、とりわけ労働者フットボールと労働運動フットボールの間には相当の差異があったことを示し得た。そこから引き出される帰結、社会主義的プロレタリア的社会ミリューは明らかに、社会史的研究がなお70-80年代に推定したのよりもはるかに強く包含されなかったという帰結は、スポーツ史を越えて興味を惹く。広範な公衆に向けられたハルトムート・ヘリング編集のルール地方のフットボール史 独特のタイトル「千の(無数の)ダービーの国で」を持つ は、20世紀初期についてもDFBフェライン、宗派的、社会民主主義的、共産主義的、「ワイ

ルド（無届の、奔放な）」フットボール・チーム、企業スポーツチーム、ポーランド人ソコルフェラインからの色とりどりの混合物を示した。

3)「赤いウィーン」 労働者フットボールフェラインが「公式の」連盟との対抗組織を創立せず、逆に「ブルジョア」フェラインが社会主義的になった連盟から脱退し、新しいフットボール同盟を創立するという程度に強い位置を占めた。

これについてマチアス・マルシックが社会民主主義的フットボールと並んで同様に労働者ミリューでのフットボールの二つの更なる発展系統を突き止めた。すなわち、ボヘミアンの要素で貫かれた職業スポーツの大衆文化 たしかにブルジョアの勢力に導かれたが、まさに労働者も魅了した、そして支配的な労働者文化の内部に、その横にあった「労働者フットボール文化」 フェライン忠実と地域結合といったカテゴリーで特徴づけられ、「ブルジョア」フットボールとの接触も憚らなかった の二つの発展系統である。

4)企業共同体イデオロギーのしるしで生じた職場スポーツへの研究は、選ばれた地域にとってのみ存在する。また、カトリックやプロテスタント出所の宗派的スポーツ連盟と都市空間での相應の社会ミリューとの関連も余り研究されていない。それに対して、更なる都市的社会ミリューの文化エレメントとしてユダヤ人スポーツはより多くの注意を見出した。ドイツ語圏のフットボールの幾人かのパイオニアがユダヤ人、その最重要人物ウォルター・ベンゼマン（多数のフットボールフェラインと並んで雑誌『キッカー』も創立）重要なフェラインが同化ユダヤ人に根付いたこと（ex アイントラハト・フランクフルト、バイエルン・ミュンヘン、アウストリア・ウィーン）マックス・ノルダウの「筋肉ユダヤ人（ムスケルユードンム）」の影響からすでに第一次大戦前に明確にシオニズムに向かうトゥルネン・スポーツフェラインが成立。その最重要なものがSK ハコー・ウィーン（1924/25年大陸で最初のプロ・フットボール選手権獲得、この時点で世界最高のチームの一つ）。

ナチスの権力掌握後ドイツではユダヤ人はトゥルネン・スポーツフェラインから排除され、固有の連盟マカビとシルト（盾）に制限され、1938年11月ユダヤ人スポーツはポグロムの夜の夜、暴力的に粉碎された。

4. 第一次大戦と文化的「アメリカ化」が社会的ミリューにおける社会的分節化をほぐすことに寄与した。すでに両大戦間期に観客スポーツのような階層を越えた文化財の出現を助けた。それのよく研究される例はオーストリアの首都である。

1)ウィーンのフットボール ここでボヘミアンのカフェハウス文化がプロレタリアの都市周縁区域（フォアシュタット）ならびにユダヤ的、チェコ的エレメントと混合。ロマン・ホラクとヴォルフガング・マーデルトハナーがこの文脈で「都市コスモポリタニズムの文化」について語った。ワイマール共和国においてよりも遥かに強くオーストリアの首都ではコスモポリタニズム的なものが労働者へのフットボールの社会的定着をぶち壊し、知識人や作家もヨゼフ・ウリディルやマチアス・シンデラーのような労働者都市周縁区域出身のスターのことを夢中になって喋った。1924年創立のウィーンに集中した大陸で最初のプロリーグのファンは、プロレタリア呑み屋（クナイペ）ではなく、カフェ・パーシファル（アウストリア）カフェ・レッシュ（ヴァッカー）あるいはカフェ・ホルプ（ラピッド）で落ち合った。30年代初めのその頂点に「驚異（ヴンダー）チーム」が立ち、中欧（ミットローパ）カップで繰り返し成功を収める。オーストロ・ファシズムへの移行を幾らか無事に生き残ったものの、「併合」とともにこのウィーン・フットボール文化は絶滅する。多数のフットボール場はナチスによって軍事教練用に転用され、ユダヤ人フェラインは禁止され、HJへの青年の組織化によって、それまで街頭（シュトラッセ）フットボールに興じた成人をクラブから奪った。多数のトップフェラインでは重要な地位を占めるナチス党員が支配した。

2) 20年代の前衛的な都会性(アーバニテート)は伝統的な性秩序にも影響を及ぼした。

第一次大戦後、勤労女性が工業、商業、サービス業の近代的セクターに集中する。速記者兼タイプスト、流れ作業労働者、販売員、国民学校教師あるいは社会事業従事者のような新しい「典型的」女性職業が成立、それと平行して「新しい女」像が成立する。その下で理解されたのは、非政治的で消費志向的で都会の若い使用人である。理念的にボーイッシュ・ポップ(ブービー・カップ)、化粧した顔、流行の服でタバコを吸い、余暇を映画館で、あるいはチャールストンダンスをして使う。そうした女性は今や全ての可能なスポーツ種目(陸上、重競技、スキージャンプ、登山、グライダー、オートスポーツ)も試みた。「新しい女」の変種として「スポーツガール」が流行りだした。30年代の再軍事化とともにこの傾向も途絶える。特に男性的記号化されたフットボールで初めて、60年代の文化的勃興気分が再び女性の活動の今度は後まで残る興隆をもたらしたが。

3) ドイツ語圏に関する研究でこれまで露出不足の領域は、フェラインに結びついたアイデンティティの分析である。フェライン優位性がどの程度地域的、市区域と関係した社会的、政治的あるいは宗派的所与を反映したか、それがどの程度それから自律的だったかという問題は未解明である。この文脈で、伝統的社会的ミリューの解体と平行して確立した新しい都会的サブカルチャーにおけるスポーツの価値にも関心が寄せられるべきである。

4) さらに重要な領域は都市社会での移民の統合におけるスポーツの役割である。従来とりわけルール地方でのポーランド人移住者に相応の注意が向けられた。だが原則的には特にフットボールは両大戦間期以来全ドイツ語圏で労働移民の本質的な文化財である。スイスでは20年代初めに多くの都市でイタリア人移住者の独自のスポーツフェラインが成立した。トランスナショナルリテート史と「ポストコロニアル研究」のパーспекティヴからのドイツ語圏の社会の「読み物」への今日

的トレンドは都市史的スポーツ研究にも有益な影響を与え得る。

5) 「階級」、「階層」あるいは「ミリュー」といった構造中心に配列される解釈モデルと並んで、主体から出発する生活世界アンザッツをより強く引き立てることが適切である。

イギリスの研究が示したことは、スポーツにとっての世俗的魅力の分析のみが、呑み屋、組織されないスポーツ(例えばストリートフットボール)、職場や近隣でのネットワークのミクロレベルを取り入れ、スポーツ史記述の「古典的」資料類(プレス、連盟、フェラインアルヒーフ、編年史)と並んで自己証言や「オーラルヒストリー」も顧慮することを正しく評価することができるということである。ドイツ語圏の研究ではスポーツ史のアカデミックな確立の過程で生活世界アンザッツは傾向的に後景に置かれた。1978年ロルフ・リントナーとハインリヒ・Th.バウアーがルール地方のフットボールの社会史研究で、近隣の町(フォアオルト)のかつての活動家とのインタビューから、居住地域、職場とフェライン所属の密接な関係を明確にした。1988年ジークフリート・ゲールマンはフットボールを「工業的生活世界」に関係づけ、相応の写真資料も提出した。これに反して1997年クリスチアーネ・アイゼンベルクが雑誌『歴史と社会』の綱領的論説で、個人へのはっきりした関心を抱く「新しい文化史」にスポーツ史が依拠することに留保を表明した。「なぜ社会理論とともに社会概念も放棄されるのかがスポーツのパーспекティヴから理解されないが、この厳格さはミクロレベルへの制限と、したがって重要性喪失を含んでいる。」「新しい文化史」の方法的勧めはスポーツ史にとって「全く有用でない」、むしろこれは「構造化の助けが切実に頼りであり、この理由からも体系的な社会科学と、構造史としての社会史の方法に手を付ける。」「『解釈学的な転回』へのいかなるきっかけも」ない、「なぜなら、はるかに優れている分析的インストゥルメンタリウム[特定の問題解決のための概念・方法・理論などの手段の全体]が存在しているから」だと言う。

5. 更なる研究分野としてのスポーツの都市建築的アспектについて。

1) 「長期持続 (longue durée)」のパーセクティヴから「スタジアム建造の人類学」への原理的問いが立てられる。いかなる条件下で社会は、古典古代、中米のプレコロンブスの高度文化、あるいは 20 世紀から知るように、大観衆の集まりのためのモノメンタルな建築物の建設に向かうのかという問い。そうした建築史的アспектをも取り上げる連関にとって、例えば 20 世紀のスタジアム建築を「後期ブルジョア的公共性」のエレメントとして把握したフランツ・ヨアヒム・フェルスポールの 30 年前の芸術史著作が参照されるべきである。観客スポーツと並んで、この文脈で見世物の別の形態も (例えば宗教的セレモニーや劇場) も文化史的ファクターとして評価されるべきである。

2) スポーツ・インフラストラクチュア建設と都市発展の間の連関のより厳密な調査が肝心である。スポーツ・インフラ建設が都市像に持つ配列に関しても、社会的ヒエラルキーに反映される建築に関しても興味深い社会地勢的 (トポグラフィッシュ) 研究対象であるにもかかわらず、ドイツ語圏の研究はつい最近までこの問題圏に取り組みなかった。ここでもイギリスのフットボールアリーナとアメリカの野球スタジアムへの研究を提出した英語圏のスポーツ史が完全に先行している。

3) このテーマへの数ページが見られるエリク・エッガースの書物『ワイマール共和国でのフットボール』は、スポーツ促進、自治体の経済政策、都市建設の近代化の間の興味深い関連編み細工を公表。彼によれば 20 年代初めの自治体予算には直接的なスポーツ促進への余地はほとんどなかった。例外は、明確な準軍事的背景を持ったラインラント。1927 年 DFB は初めてドイツ都市大会 (シュテットターク) で一つの協定を取り決める。都市のゲーム・スポーツ場の利用に関してスポーツフェラインの承認を公益的な制度として含む協定。同時に 20 年代は自治体スタジアム建設の頂点でもあった。

最近の研究で初めて、両大戦間期に存在したスタジアムへの個別研究と並んで、ヴェルナー・スクレントニイの『ドイツ・フットボールスタジアムの偉大な本』という百科事典的著作が出現した。約 300 のスタジアムを地方的アイデンティティと社会史、集合的記憶と個人伝記的思い出が結晶する社会的場として肖像画を描いている。

ウィーンのフットボール史研究も近年テーマにし、特にスタジアムの多機能性に注意を喚起する。すなわち、スポーツ利用から政治的示威の舞台としての使用を経て監獄や処刑場としての使用に至る機能。ベルリンのハーゼンハイデや「ライヒスシュポルトフェルト」のような異なる都会的トゥルネン・スポーツ場については研究がある。

4) 都会的男の場所としてのスタジアムの機能もこれまで余り分析されなかった。一般にスタジアムは男子結社の構造が展開され得た場所とみなされる。神学者・宗教教育者ハルトムート・ルツプはフットボールスタジアムを世俗宗教の「聖なる空間」として解釈し、スタジアムで、現にある、あるいはあるべき男らしい生活がドラマチックに演出され、賛美され、強められるとする。これに対して両大戦間期のイギリスの例は部分的に矛盾した所見を示す。1929 年ポーツマスとボルトンのサポーターがカップファイナルのためにロンドンに向かった列車の半分は女性で、イングランドとスコットランドの間の威信に関わるゲームのために北からロンドンに向かった特別列車にも多数の女性が夫と父親に付き従ったが、これは圧倒的に、人気のあるデパートへの用事のために小旅行を利用したものだった。現代のスタジアムでの増加する女性の居合わせには歴史的先行者があるように見えるが、ドイツ語圏についてはまだほとんど研究されていない。

5) 最広義のスポーツインフラに属する別の建物も都市建設的意味を持つ。大衆スポーツ施設、オリンピック村のような大スポーツ行事の遺産は post festum (饗宴の後に) 他の利用に供給される。純粋に建築的發展と並んで、この文脈でその時々 of ディスクルスも興味深い研究分野である。多く

は同時代人のその時々都市建築的ビジョンを裏切るものだが。

6. 「パフォーマンツ」(言語運用)概念を中心に集まる都市史とスポーツ史の交点での幾つかの研究パースペクティブについて。

いわゆる「performative turn」の前提 一般に表明、上演、儀式、行動は単純に前もって与えられたもの(Vorgegeben)を模写するのではなく、表明、上演あるいは行動の瞬間に始めて意味を生み出すということ。近代の、(誤って)言語、テキストに基盤を持つと思われた社会も、高度に、パフォーマンス、上演、演出、儀式において意思疎通され、それ自身のそのような行為において保証され、価値秩序を作ることが分かってきた。

1) スポーツ大行事において都市そのものがいかに演出されるか。一方で、近年の夏冬オリンピックの舞台でのような経済的立地マーケティングの意味において、他方で、政治的イデオロギーのシンボルとして。1928年スパルタキヤード、1980年夏オリンピックヤードを持つモスクワ、1931年労働者オリンピックヤードを持つ「赤いウィーン」、1936年夏オリンピックヤードを持つベルリン、あるいは「ヒトラー・オリンピック」への対抗行事として計画された「人民オリンピック」を持つバルセロナのように。

政治的イデオロギーとシステムの自己演出において通常都会性の特殊な形態も具体的に示されるはずだが、一方で何よりもまず経済的に動機づけられた自己演出において相異なる所見もある。つまり、夏のスポーツ行事は通常都会性を、冬のスポーツ行事は田舎風を演出しようとするというように。

2) そうした行事内部のパフォーマンス、都会的空間、スタジアム、だがまたストリートにおける編成された身体演出の分析。これは全く相異なるメッセージを送ることができる。1928年モスクワ・スパルタキヤードの開会式典は赤の広場で3万の松明手によって担われ、「インタナショナル」の共通の歌唱を、40年前に労働者賛歌の

メロディを作曲した80歳のフランス人 Pierre Degeyter が指揮。1931年ウィーン労働者オリンピックヤードの最後のクライマックスは「世界軍縮と全般的平和のために」をモットーにしたリンクシュトラッセでの10万の祭典参加者の5時間の行進。この国際労働者運動の二つの方向はその都会的根拠地において固有の力と、それによってまたその影響領域の拡大への要求も示威する大衆行事を演出した。

いくらか事態が違ったのは1935年テルアヴィヴでのマッカビヤードの開会パレードのメッセージ。数千を超える参加者が、アラブ住民の挑発を恐れたイギリス委任統治警察の禁止にもかかわらず、街頭を練り歩き、それによってシンボリックに都市を自分のものにした。

3) この文脈でしばしば重要な役割を演じたのはリレー(シュタフェッテ)。これは距離の分業的克服によって連関を象徴する特殊な能力に基づいて特に宣伝的演出に適している。中心的終点へのリレーの道を示す地図を用いて、伝えるべき内容がヴィジュアルにも示され得る。最も重要な例はオリンピック聖火リレーで、その時々開催都市をシンボリックに古代オリンピックと結びつける。

省略した文献注には数多くの未知の文献が挙げられている。今後それらの文献に当たっていく必要がある。その上で、若干のコメントを記しておきたい。まず、スポーツ史への都市史的アспектというものがこれまでのスポーツの社会史的研究とどの点で異なるのかということである。むしろ、これまでのスポーツの社会史的研究の成果と課題の総括として捉えるべきではないか。次に、その総括の中で、新しい文化史に対する議論の紹介はもう少し丹念になされるべきであろう。最後に、「パフォーマンツ」概念での都市、行事、身体演出の分析は刺激的で、新たな研究の展開を期待させるものと感じた。